



馬耳東風

如月の風が春の兆しを運びながらも、冬の冷たさを残すこの季節。わが家の庭の沈丁花の蕾が膨らみ始める光景に、小さな生命の力強さを感じると同時に、もう今年も1カ月が経ってしまったと焦っているのは筆者だけであろうか。

さて、世界を見渡すと、今年も混乱と挑戦の連続の中でスタートが切られた。

世界の動きは加速している。

ウクライナ紛争の長期化に伴うエネルギー価格の高騰や、AIとデジタル技術をめぐる先進国間の競争が激化する中、米国は国内問題と国際的なリーダーシップの両立を模索している。

一方、アジアでは中国の成長鈍化とインドの台頭が顕著であり、地域の勢力図が急速に変わりつつある。こうした世界情勢の中、日本が持つ特有の価値観や文化は、どのように活かされるべきなのか。

先日、「小学校～それは小さな社会～」というドキュメンタリー映画を観て、この問いについて深く考えさせられた。映画の舞台は実は筆者の母校であり、その縁もあってどうしても見逃すことができず映画館に足を運んだ。映画に描かれた子どもたちの掃除当番や給食当番の姿は、「小さな社会」を形作る教育そのものであり、日本社会の秩序や礼儀の基盤といえる。

この原点に気づかされたことが、何より印象的であったとともに、これらは世界が日本に期待する特徴でもあり、国際社会における強みだと改めて感じた。だが、このような強みを持ちながらも、日本はその価値を生かし

かれていないのではないだろうか。

特にアジアにおいては急速に成長する若い世代に対し、日本が何を提供し、どのように連携を深めていくかが鍵となろう。過去の成功体験や伝統にとらわれるのではなく、変化を受け入れ、新しい可能性を模索する姿勢が求められるだろう。今こそ「できない理由」ではなく、「できる理由」を考えたい。

NHKのドキュメンタリー番組で、かのイチローが「遠回りに見える道が、最善の近道になる」と語っていた言葉を思い出す。アジアの若い世代が「速さ」を武器に進化している中で、日本には変化を受け入れる柔軟性と、伝統を基盤にした進化の姿勢が求められる。

動物医療の分野では、One Healthの理念を基盤に、日本がアジアでリーダーシップを発揮する余地は大きい。感染症対策や動物福祉の向上に向けた協力を通じ、技術やサービスだけでなく、社会的価値観や教育モデルを共有することで、共に成長する道が拓けるだろう。この連携の中で重要なのは、他者を尊重しつつ、自らも変わり続ける柔軟性ではなかろうか。

映画「小学校～それは小さな社会～」が教えてくれたのは、遠回りに見える教育が実は社会全体を支える最短の道であるということだ。この価値観をいかに未来に活かし、若い世代に希望をつなぐか。それが、われわれに課された使命だと感じている。

春はもう目の前に迫っている。

新たな挑戦と成長の季節を迎えるこの時期、日本社会と動物医療の未来を共に創り出す一歩を共に進めることを願いながら、この稿を終える。

(も)